

他動性交替の地域差

佐々木冠 (札幌学院大学)・當山奈那 (琉球大学大学院)

1. はじめに

・他動性交替の類型論における日本語の位置づけ
前提となる用語

	自動詞	他動詞	方向性
使役(causative)	V_a	$V_a + \alpha$	他動詞化
逆使役(anticausative)	$V_a + \alpha$	V_a	自動詞化
両極(equipollent)	$V_a + \alpha$	$V_a + \beta$	方向性なし
自他同形(labile)	V_a		
補充(suppletive)	V_a	V_b	

$V_a \neq V_b$
 α, β は接辞など。
 $\alpha \neq \beta$

Haspelmath 1993 : 31 対の動詞 (詳細は 3 節) で検証。日本語は方向性なしの交替が優位で、特に両極型が優位。

Nichols et al. 2004 : 18 対の動詞で検証。laugh/make laugh, die/kill, sit/seat, eat/feed, learn/teach, see/show, become angry/anger, fear/scare, hide/hide, (come to) boil/(bring to) boil, burn (catch fire)/burn (set fire), break/break, open/open, dry/make dry, become straight/straighten, hang/hang (up), turn over/turn over, fall/drop. 日本語は他動詞化が優位。これは他の北アジアの言語と同様の傾向。

ナロク 2007 : 辞書に掲載されている全ての動詞で検証。日本語はもともと他動詞化優位だったが、二段活用の喪失により、両極型が優位に。

問題 : 日本語方言は他動性交替に関して一様か？

日本語族(Japonic family)に属する北 (北海道) と南 (沖縄) の方言の他動性交替を標準語の他動性交替と対照。

2. 他動性交替を左右することが予測される要因

(i) 生産的な結合価交替形態法の有無

標準語 : 使役のみ。short causative の-(s)as は語彙的他動性交替で用いられる-as と同形。

北海道・東北地方の方言 : 使役だけでなく、逆使役の形態法もある。-rasar (北海道方言 (山崎 1994)、盛岡市方言 (竹田 1998)、宇都宮方言 (加藤 2000)) または-rar (山形市方言 (森山・渋谷 1988)、福島方言 (白岩 2012))。

Cf. 自動詞化優位の現代ヨーロッパ諸言語 (再帰形態素による自動詞化あり) vs. 方向性なし優位 (non-directed) の英語

(ii) 活用体系の違い

標準語 : 一段系(...i-, ...e-)と五段系(...as-, ...ar-)の他動性交替は両極的

tok.e-ru --- tok.as-u (語彙的他動性交替の接尾辞と語根の境界は「.」で示す。)

uk.ar-u --- uk.e-ru

二段活用がある方言 (九州型で代表させる) : 方向性がはっきりする。

tok-u-ru --- tok.as-u 他動詞化 (/u/は終止、已然用の活用語尾の一部 (九州))

uk.ar-u --- uk-u-ru 自動詞化 (/u/は終止、已然用の活用語尾の一部 (九州))

予測：

北の方言（逆使役あり）では、標準語より自動詞化優位の他動性交替が期待され、南の方言（二段活用が存在）では、標準語より方向性が明確な他動性交替が期待される。

(iii) (i)および(ii)の条件が同じでも生じる他動性交替の地域差

この発表では、(i)と(iii)で生じる他動性交替の地域差を検証する。(ii)で生じる他動性交替の地域差に関しては別な機会に検証したい。ただし、(ii)による歴史的な差についてはすでにナロック 2007 で検証が行われている。日本語の中央方言は二段活用の喪失により、他動詞化優位から両極型に変わった。上の「予測」では方向性に関しては中立的に「方向性が明確な」とだけ書いた。しかし、南に分布する二段活用が残存する方言が古い日本語から語彙を継承している以上、実際に期待されるのは他動詞化優位型の他動性交替である。

検証の対象とする方言：北海道方言と首里方言

北海道方言を検証の対象とするのは、逆使役の生産的な形態法があるから。

首里方言は、使役形態素を二重・三重に使った述語形成がある点では、標準語と大きく異なる（當山 2011）。一方、逆使役がなく、二段活用も残存していない点では標準語と同様である。したがって、他動性交替に関する形態法は、語彙的なものに限定すると、東京方言と同じタイプである。首里方言の他動性交替の傾向性が標準語と異なるとすれば、形態法以外の要因が関与していることが考えられる。

方言間の対照に用いるリスト：Haspelmath 1993 の他動性交替のペア 31 対。標準語に関しては、プラシャント・パルデシ氏が中心になって作成した国立国語研究所の下記のウェブサイトに掲載されているものを用いた。このウェブサイトには北海道方言のデータも掲載されている。標準語のデータは Haspelmath 1993 とずれがある。一つの対につき一つの対しか載せていないためである。Haspelmath 1993 では複数の対が掲載されている対がある（例：open/open ak-u --- ak.e-ru (C), hiraku (L)）。また、標準語のデータは現在ウェブページで確認できるものよりも古いバージョンに基づいている。

有対自他動詞の地理類型論的なデータベース

<http://verbhandbook2.ninjal.ac.jp/verbpairmap/>

3. 北海道方言と標準語

北海道方言は 16 世紀以降、北東北の方言の強い影響下で形成された方言である（小野・奥田 1999）。北海道には 19 世紀半ば以降全国から人口が流入したが、北東北の方言の影響は依然として強く残っている。ここで取り上げる自発述語形成などの形態法も北東北の方言と共通の特徴である。

Comrie (2006) reordering of 31 pairs	北海道方言			標準語			
	自動詞	他動詞		Haspelmath (1993) ordering	自動詞	他動詞	
1. boil	wak-u	wak.as-u	C	18	wak-u	wak.as-u	C
2. freeze	koor-u, koor-asar-u	koo.ras-u	C	25	koor-u	koor.as-u	C
3. dry	kawak-u	kawak.as-u	C	29	kawak-u	kawak.as-u	C
4. wake up	ok.i-ru	ok.os-u	E	1	ok.i-ru	ok.os-u	E
5. go out/put out	de-ru, das-asar-u	das-u	E/A	20	de-ru	das-u	E

6. sink	sizum-u	sizum.e-ru	C	11	sizum-u	sizum.e-ru	C
7. learn/teach	osowar-u	osie-ru	E	8	osowar-u	osie-ru	E
8. melt	<i>tok.e-ru,</i> <i>tok.as-ar-u</i>	<i>tok.as-u</i>	E/A	13	tok.e-ru	tok.as-u	<i>E</i>
9. stop	tom.ar-u	tom.e-ru	E	31	tom.ar-u	tom.e-ru	E
10. turn	maw.ar-u	maw.as-u	E	23	maw.ar-u	maw.as-u	E
11. dissolve	<i>tok.e-ru,</i> <i>tok.as-ar-u</i>	<i>tok.as-u</i>	E/A	26	tok.e-ru	tok.as-u	<i>E</i>
12. burn	yak.e-ru	yak-u	A	3	yak.e-ru	yak-u	A
13. destroy	kow.are-ru	kow.as-u	E	14	kow.are-ru	kow.as-u	E
14. fill	mit.i-ru	mit.as-u	E	27	mit.i-ru	mit.as-u	E
15. finish	owar-u, owar.asar-u	owar.as-u	C	22	owar-u	owar.as-u	C
16. begin	hazim.ar-u	hazim.e-ru	E	7	hazim.ar-u	hazim.e-ru	E
17. spread	hirog.ar-u	hirog.e-ru	E	10	hirog.ar-u	hirog.e-ru	E
18. roll	korog.ar-u	korog.as-u	E	24	korog.ar-u	korog.as-u	E
19. develop	hatten su-ru	hatten s-ase-ru	C	16	hatten su-ru	hatten s-ase-ru	C
20. get lost/lose	nakunar-u	nakus-u	E	15	nakunar-u	nakus-u	E
21. rise/raise	tat-u, tat.asar-u	tat.e-ru	C	21	tat-u	tat.e-ru	C
22. improve		kairyoo su-ru, kaizen su-ru		28		kairyoo su-ru, kaizen su-ru	
23. rock	yur.e-ru	yur.as-u	E	19	yur.e-ru	yur.as-u	E
24. connect	tunag.ar-u, tunag.asar-u	tunag-u	A	17	tunag.ar-u	tunag-u	A
25. change	kaw.ar-u	ka.e-ru	E	12	kaw.ar-u	ka.e-ru	E
26. gather	atum.ar-u	atum.e-ru	E	9	atum.ar-u	atum.e-ru	E
27. open	ak-u	ak.e-ru	C	5	ak-u	ak.e-ru	C
28. break	war.e-ru	war-u	A	2	war.e-ru	war-u	A
29. close	<i>tozi-rasar-u</i>	<i>tozi-ru</i>	A	6	tozi-ru	tozi-ru	<i>L</i>
30. split	<i>wake-rasar-u</i>	<i>wake-ru</i>	A	30	wak.are-ru	wak.e-ru	<i>E</i>
31. die/kill	sin-u	koros-u	S	4	sin-u	koros-u	S

点数：A (Anticausative), C (Causative), E (Equipollent), L (Labile), S (Suppletive)の数を反映した
もの。逆使役型の対が五つあれば、A を 5 点とする。ただし、一つの対に複数の型の他動性
交替が対応する場合、たとえば、E と A の両方が見られる場合は、E と A それぞれに 0.5
加点することにする。

北海道方言：A=6.5, C=8, E=14.5, S=1

標準語：A=3, C=8, E=17, L=1, S=1

なお、北海道方言の 2. freeze の自発語形は koor.as-ar-u と分析できる可能性がある。この
方言では、/s/で終わる動詞語根に自発接尾辞が付加される際、「さ」の連続を嫌って、「さ」
を一つ落とす現象がある（「励ます」の自発形は、/hagemas-ar-u/であって*/hagemas-asar-u/
ではない。Sasaki 2011 参照）。15. finish の自発語形も同様に、owar.as-ar-u と分析できる可
能性がある。仮にこの分析が妥当だとすると、北海道方言の他動性交替の数値は次のよう
になる。

北海道方言 : A=7.5, C=7, E=14.5, S=1

どちらの数値をとっても、北海道方言は標準語に比べて、(i) 自動詞化が多く、(ii) 両極的な他動性交替が少ないと言える。

4. 首里方言と標準語

	自動詞	他動詞	タイプ	自動詞	他動詞
1. boil	wacuN	wakasuN	C	wak-	wak.as-
2. freeze	kuhaiN	kuharasuN	C	kuhar-	kuhar.as-
3. dry	ka:racuN	ka:rakasuN	C	ka:rak-	ka:rak.as-
4. wake up	?uki:N	?ukusuN	E	?uk.i-	?uku.s-
5. go out/put out	?Nzi:N	?NzasuN	E	?Nz.i-	?Nz.as-
6. sink	sizimuN	sizimi:N	C	sizim-	sizimi-
7. learn/teach	naraiN	nara:suN	C	nara(w)-	nara(w).as-
8. melt	tuki:N	tukasuN	E	tuk.i-	tuk.as-
9. stop	tumaiN	tumi:N	E	tum.ar-	tum.i-
10. turn	ma:iN	ma:suN	E	ma:.r-	ma:.s-
	miguiN	migurasuN	C	migur-	migur.as-
11. dissolve	tuki:N	tukasuN	E	tuk.i-	tuk.as-
12. burn	jaki:N	jacuN	A	jak.i-	jak-
13. destroy	jaNdijuN	jaNzuN	A	jaNd.i-	jaNd-
	ku:ri:N	ku:suN	E	ku:.ri-	ku:.s-
14. fill	micuN	mitasuN	C	mit-	mit.as-
15. finish	?uwajuN	?uwarasuN	C	?uwar-	?uwar.as-
16. begin	hazimajuN	hazimijuN	E	hazim.ar-	hazim.i-
17. spread	hirugajuN	hirugijuN	E	hirug.ar-	hirug.i-
18. roll	kurubuN	kurubasuN	C	kurub-	kurub.as-
19. develop	hatten suN	hatten simi:N	C		
20. get lost/lose	ne:NnaiN	ne:NnasuN	E	ne:Nna.r-	ne:Nna.s-
21. rise/raise	tacuN	tatijuN	C	tat-	tat.i-
22. improve	(なし)	(なし)			
23. rock	juri:N	jurasuN	E	jur.i-	jur.as-
24. connect	cirugaiN	ciruzuN	A	cirug.ar-	cirug-
	cinagaiN	cinazuN	A	cinag.ar-	cinag-
25. change	kawajuN	ke:juN	E	kaw.ar-	ke:- (< ka(w).e-)
26. gather	?acimajuN	?acimijuN	E	?acim.ar-	?acim.i-
27. open	?acuN	?aki:N	C	?ak-	?ak.i-
28. break	wari:N	wajuN	A	war.i-	war-
29. close	simaiN	simi:N, mici:N	E	sim.ar-	sim.i-, micir-
30. split	wakari:N	waki:N	E	wak.ari-	wak.i-
31. die/kill	sinuN, ma:suN	kurusuN	S	sin-, ma:s-	kurus-

標準語 : A = 3, C = 8, E = 17, L = 1, S = 1

首里方言 : A = 4, C = 11, E = 14, S = 1

日本語標準語と琉球語首里方言は、他動性交替に関する形態論的な条件が同じであるに

もかかわらず、以下に示す違いがある (sinuN に対応する他動詞的表現には sinasuN もある (下地早智子氏の指摘による)。sinasuN は sinuN の語根に使役接尾辞が付加された形式である。この形式は、対象が人間の場合には「痛い目にあわせる」のような意味になる。このような意味のシフトが生じているため、前ページの表では die/kill の他動詞に対応するセルには含めなかった)。

- (i) 首里方言の方が他動詞化が多く、
- (ii) 首里方言の方が、両極型が少ない。

5. 三つの方言の点数の対照

北海道方言 : A=6.5, C=8, E=14.5, S=1 北
標準語 : A=3, C=8, E=17, L=1, S=1 ↓
首里方言 : A=4, C=11, E=14, S=1 南

北海道方言 ; 標準語 ; 首里方言

1. C;C;C, 2. C;C;C, 3. C;C;C, 4. E;E;E, 5. (go out/put out) E/A;E;E, 6. C;C;C, 7. (learn/teach) E;E;C,
8. (melt) E/A;E;E, 9. E;E;E, 10. (turn) E;E;E/C, 11. (dissolve) E/A;E;E, 12. A;A;A, 13. (destroy)
E;E;A/E, 14. (fill) E;E;C, 15. C;C;C, 16. E;E;E, 17. E;E;E, 18. (roll) E;E;C, 19. C;C;C, 20. E;E;E, 21.
C;C;C, 22. --, 23. E;E;E, 24. A;A;A, 25. E;E;E, 26. E;E;E, 27. C;C;C, 28. A;A;A, 29. (close) A;L;E,
30. (split) A;E;E, 31. S;S;S

北海道方言と標準語に違い、標準語と首里方言に違い、三つとも別

・北の自動詞化優位、南の他動詞化優位

傾向性 1. 標準語に比べて首里方言と北海道方言は両極的な交替の占める割合が低い。方向性のある交替の割合が高い。labile (自他同形) も二つの方言で 0 である。

傾向性 2. 首里方言は他動詞化 (使役) の割合が高く、北海道方言は自動詞化 (逆使役) の割合が高い。

首里方言の他動性交替に関する形態的条件が標準語と同じなのに、何故他動性交替に差が出るのか？

考え得る要因

(i) 二段活用が存在する方言の地理的隣接

九州には二段活用が残存する方言が存在する。琉球語諸方言の中にも二段活用がある方言が存在する (九州方言とは必ずしも同じ形でではないが)。

(ii) (i)に還元できない地域特徴

6. まとめ

本発表では 2 節で言及した他動性交替を左右する形態論的な要因のうち(ii)活用体系の違いを考察から外した。5 節で首里方言の他動詞化優位の考え得る要因として二段活用が存在する方言との地理的隣接を挙げたが、ここには論理の飛躍がある。二段活用が存在することは必ずしも他動詞化が優位な体系になることを保証しない。2 節で示した uk.ar-u --- uk-u-ru (「受かる・受ける」に対応) の例からも明らかだが、標準語の両極的自他交替に逆使役型 (自動詞化) 型の交替が対応する可能性があるからだ。首里方言の他動性優位の要因を考える上で、二段活用がある方言の他動性交替のあり方を調べることは重要である。これについては、将来の研究で明らかにしたい。

南北両極における方言の他動性交替の傾向は、日本語以外の言語との関係も考慮する必要があるかもしれない。北海道周辺地域の言語 (日本語北海道方言・東北方言、アイヌ語、ニヴフ語) は系統関係が立証されていない。それにも関わらずこれらの言語は生産的な自

動詞化形態法を持っている点で共通している。北アジアが他動詞化優位の地域であることを考えるとこれは際立った特徴と言ってよい。佐々木・奥田・白石(2012)は、北海道周辺地域でだけ自動詞化形態法が生産的であることが他動性交替における地域特徴である可能性を示唆する。南端の日本語族の他動性交替が周辺地域の諸言語とどのような関係を持つのか(あるいは無関係なのか)についても将来の研究で追及する必要がある。

参考文献

- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative alternations. In Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*. 87-120. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Nichols, Johanna, David Peterson and Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8. 149-211.
- Sasaki, Kan (2011) Syllable deletion as a prosodically conditioned derived environment effect. In: William McClure and Marcel den Dikken (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* Vol.18, 214-225. CSLI: Stanford.
- 小野米一・奥田統己(1999)『北の生活文庫 8 北海道のことば』北海道新聞社.
- 加藤昌彦 (2000) 「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25-1. 1-58.
- 佐々木冠・奥田統己・白石英才(2012)「北海道周辺言語における他動性交替」北海道方言研究会第200回記念大会での発表.
- 白岩広行(2012)「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24. 35-53.
- 竹田晃子(1998)「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』37. 33-44.
- 當山奈那(2011)「動詞の自他の派生関係と使役構文の意味的構造: 沖縄首里山川方言の場合」『日本方言研究会第92回研究発表会発表原稿集』. 9-16.
- ナロック, ハイコ(2007)「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」『レキシコンフォーラム』3. 161-193.
- 森山卓郎・渋谷勝己(1988)「いわゆる自発について: 山形市方言を中心に」『国語学』152. 47-59.
- 山崎哲永(1994)「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」『ことばの世界: 北海道方言研究会 20周年記念論文集』北海道方言研究会編. 227-237. 北海道方言研究会.